

ギリシア・トルコ強制的住民交換と正教徒のアイデンティティ

村田 奈々子

一九二三年一月三〇日、スイスのローザンヌで、「ギリシア人住民とトルコ人住民の交換協定」（以下、住民交換協定）がギリシアとトルコとの間で締結された。この協定は、トルコ領内のギリシア人と、ギリシア領内のトルコ人を交換することを趣旨とした。協定では「交換」と表現されていたものの、実際は、ギリシア王国からトルコ人を強制的に追放し、同様にトルコ共和国からギリシア人を強制的に追放することを定めたものだった。

この世界史上初の強制的な住民交換は、国際連盟の主導の下で実施された。一九一二年にはじまるバルカン戦争期からの自発的な住民の移動も含めて、約一五〇万人にのぼる大量の人々が、難民として小アジアとバルカン半島南端

のあいだを移動することになった。

本報告では、まず、住民交換協定が締結されるにいたる歴史的背景を振り返り、オスマン帝国における正教徒支配について基本的事実を確認した。その後、ギリシア・ナシヨナリズムの影響が強まる中で、正教徒のアイデンティティにどのような変化がみられたか、もしくはみられなかったかについて、いくつか具体的な例を紹介した。その際、オスマン帝国下で正教徒を統括していた世界総主教座とギリシア・ナシヨナリズムとの関係にも言及した。最後に、強制的住民交換当時の小アジアの正教徒のアイデンティティは、「ギリシア人」と簡単に同一視されるものではなかったことを示した。本報告からは、宗教とナシヨナル・アイ

デンティイの間のより錯綜した関係が明らかになった。第一次世界大戦後に続いたギリシア・トルコ戦争の結果、住民交換協定が結ばれた。この協定によって、ギリシア・ナシヨナリズムが推進した領土拡張政策（メガリ・イデア）は終焉を迎えた。一方、トルコにとってこの協定は、トルコ人の民族国家形成の最初の一步となった。

この住民交換協定では、「ギリシア人」であること、あるいは「トルコ人」であることを見極める唯一の基準は、宗教におかれた。正教を信仰する者が「ギリシア人」として、イスラーム教を信仰する者が「トルコ人」と分類された。まさに、宗教アイデンティイがナシヨナル・アイデンティイに直結するという見方であった。それぞれが、みずからの「母国」に住むべきだという理念のもと、長年住み慣れた土地から強制的に去ることを余儀なくされた。

オスマン帝国の統治形態を考えると、この基準はまったく的外れとは言えず、ある程度理にかなっているように思われた。オスマン帝国は、イスラームの伝統に従って、領内の臣民を宗教・宗派の違いで分類し支配してきた。臣民は、まずはイスラーム教徒か非イスラーム教徒かに分けられた。非イスラーム教徒は、さらに正教徒、アルメニア教徒、ユダヤ教徒に区分され、それぞれが共同体を形成した。正教徒はオスマン帝国の異教徒の中で最大多数を占めてい

た。正教徒に分類された集団の中には、言語やエスニシティの点で、さまざまな人々が含まれていた。ギリシア語を話す者、スラヴ語系の言語を話す者、ロマンス語系の言語を話す者などである。彼らのアイデンティイは、まずは正教徒であることに置かれ、言語やエスニシティに基づく意識は二次的なものだった。世界総主教は民族の違いを問わない全正教徒の長としての普遍的な立場を保持していた。

しかしながら、一九世紀になると、バルカン半島ではナシヨナリズムの影響を受けて、正教徒の共同体からの離脱が相次ぎ、ギリシア、ブルガリア、セルビア、ルーマニアといった国民国家が形成された。この結果、第一次世界大戦直前のオスマン帝国の正教徒共同体はほぼ小アジアに限定された。この共同体は、言語面からみるとほぼギリシア語話者で占められることとなった。

正教徒共同体のギリシア化が進むのとはほぼ時を同じくして、ギリシア・ナシヨナリズムの影響がこの共同体に浸透していった。メガリ・イデアイデオロギーの「未回収の」ギリシア人とは、この共同体の正教徒のことであると考えられたためである。

ギリシア国家は、オスマン帝国にギリシア学校を設立したり、ギリシア文化協会を後押ししたりして、正教徒にギリシア人アイデンティイを植え付けようとした。この結

ギリシア・トルコ強制的住民交換と正教徒のアイデンティティ(村田)

果、正教徒の中には一定程度ギリシア・ナシヨナリズムを受容する者も現れた。ギリシア・ナシヨナリズムの影響は、世界総主教座にも及んだ。世界総主教座は、普遍的な立場から徐々に離れ、二〇世紀はじめにはギリシア・ナシヨナリズムを支持する立場に傾斜していった。

しかしながら、オスマン帝国のすべての正教徒が、ギリシア・ナシヨナリズムの一方的な受け手ではなかった。アイデンティティの所在は実に様々だった。

第一の例として挙げられるのが、ギリシア人という意識は持ちつつも、それがギリシア国家のナシヨナリズムと必ずしも結びつくことがなかった人々の存在である。多民族と共生する「東方帝国」の建設を構想したコンスタンティノープル協会に集ったのは、そのような正教徒だった。

第二に、ギリシア・ナシヨナリズムに晒されながらも、ギリシア民族としての意識を持つことなしに、正教徒アイデンティティを保持しつづけた人々である。代表的なのは、小アジア内陸のカツパドキア周辺の正教徒である。

第三の例は、黒海沿岸の正教徒である。彼らもまたギリシア・ナシヨナリズムに晒され、現代ギリシア語を学び習得していった。しかし彼らにとって、ギリシアは自分たちの意識から遙かに遠い国家でしかなかった。彼らの想像力のなかでは、ギリシアよりもむしろロシアが、自らのアイ

デンティティを重ね合わせることのできる国家だった。

以上のように、オスマン帝国末期の小アジアの正教徒のアイデンティティは、決して一枚岩的なありようを示していなかった。それにもかかわらず、住民交換協定は、宗教を民族アイデンティティを判断する唯一の基準とした。正教徒をギリシア人と見なすこの決定は、ギリシア・ナシヨナリズムの延長線上にあったと言えることができる。しかし、まっさきに手のひらを返したのが、オスマン帝国でギリシア・ナシヨナリズムの旗振り役であった世界総主教座だった。一般信徒の中には、小アジアに留まるためイスラーム教徒に改宗する者もいた。

強制力をともなった住民交換によって、ギリシアに移住した正教徒は、その後ギリシアのギリシア人となるために、またすでにギリシア人に住んでいたギリシア人から同じギリシア人として認められるために、長い年月を要することになった。

(東洋大学文学部史学科教授)